

シグナルとシグナレス

宮沢 賢治

(一)

「ガタンコガタンコ、シューフッフッ、

さそりの赤眼が 見えた頃、

四時から今朝も やって来た。

遠野の盆地は まっくらで、

冷たい水の 声ばかり。

ガタンコガタンコ、シューフッフッ、

凍えた砂利に 湯気を吐き、

火花を闇に まきながら、

蛇紋岩の 崖に来て、

やっと東が 燃えだした。

ガタンコガタンコ、シューフッフッ、

鳥が鳴きだし 木は光り、

青々川は 流れたが、

丘もはざまも 一面に、

まぶしい霜を 載せていた。

ガタンコガタンコ、シューフッフッ、

やっぱり駆けると あったかだ

僕はほうほう 汗が出る。

もう七八里 馳せたいな、

今日も、一日 霜曇り。

ガタンガタン、ギー、シューシュー。」

軽便鉄道の東からの一番列車が少し慌てたようにこう歌いながらやってきて止まりました。機

関車の下からは、力のない湯気が逃げ出していき、細長いおかしな形の煙突からは青い煙が、

ほんの少うし立ちました。

そこで軽便鉄道つきの電信柱どもは、やっと安心したように、ぶんぶんとうなり、シグナルの柱はかたんと白い腕木を上げました。このまっすぐなシグナルの柱は、シグナレスでした。

シグナレスはほっと小さなため息をついて空を見上げました。空には薄い雲が縞になっていっばいに満ち、それは冷たい白光、凍った地面に降らせながら、静かに東へ流れていたのです。

シグナレスはじっとその雲の行く方を眺めました。それから優しい腕木を思いきりそっちの方へ伸ばしながら、ほんのかすかに独り言を言いました。

「今朝は伯母さんたちもきつとこっちの方を見ていらっしやるわ。」シグナレスはいつまでもいつまでもそっちに気をとられておりました。

「カタン。」

10 【蛇紋岩】岩石の一種で、主に蛇紋石からなる。表面に蛇の皮のような模様があり、光沢が見られる。

6 【里】一里はおよそ三・九キロメートル。

6 【馳せる】走る。馬や車などを走らせる。

11 【少うし】少し。

13 【腕木】柱などから、横に突き出すような形に取り付けた木。

後ろの方の静かな空でいきなり音がしましたのでシグナレスは急いでそっちを振り向きましました。ずうっと積まれた黒い枕木の向こうにあの立派な本線のシグナル柱が今ほるかの南から、輝く白煙を上げてやってくる列車を迎えるためにその上の硬い腕を下げたところでした。

「おはよう今朝は暖かですね。」本線のシグナル柱はキチンと兵隊のように立ちながらいやに真面目くさって挨拶しました。

「おはようございます。」シグナレスは伏し目になって声を落として答えました。

「若様、いけません。これからはあんなものにやたらに声をおかけなさらないように願います。」本線のシグナルに夜電気を送る太い電信柱がさももったいぶって申しました。

本線のシグナルはきまり悪そうにもじもじして黙ってしまいました。気の弱いシグナレスはまるでもう消えてしまいか飛んでしまいかかしたいと思いました。けれどもどうにもしかたがありませんでしたからやっぱりじっと立っていたのです。

雲の縞は薄い琥珀の板のようにうるみ、かすかなかすかな日光が降ってきましたので、本線シグナルつきの電信柱はうれしがって向こうの野原に行く小さな荷馬車を見ながら低く調子はずれの歌をやりました。

「ゴゴン、ゴゴゴ、

薄い雲から

酒が降りだす、

酒の中から

霜が流れる。ゴゴンゴゴゴ

ゴゴンゴゴゴ霜が解ければ

2 【枕木】鉄道のレールの下に敷かれている、木やコンクリートの角材。
7 【やたらに】むやみに。
8 【さも】いかにも。
12 【琥珀】大昔の木のやにが、地中で石のようになって、赤茶色や黄色で、つやがある。

土は真っ黒。

馬はふんごみ

人もべちゃべちゃゴゴンゴゴゴ、」

(一)

それからもっともっと続けざまにわけのわからないことを歌いました。

その間に本線のシグナル柱が、そっと西風に頼んでこう言いました。

「どうか気にかけてください。こいつはもうまるで野蛮なんです礼式も何も知らないのです。実際私はいつでも困ってるんですよ。」

軽便鉄道のシグナレスは、まるでどぎまぎしてうつむきながら低く、

「あら、そんなことございせんわ。」と言いましたがなにぶん風下でしたから本線のシグナルまで聞こえませんでした。

「許してくださいるんですか、本当を言ったら、僕なんかあなたに怒られたら生きているかいもないんですからね。」

「あらあら、そんなこと。」軽便鉄道の本で造ったシグナレスは、まるで困ったというように肩をすぼめました。実はその少しうつむいた顔は、うれしさにぼっと白光を出していました。

「シグナレスさん、どうか真面目で聞いてください。僕あなたのためなら、次の十時の汽車が来るとき腕を下げないで、じっとがんばり通してでもみせますよ。」僅かばかりヒュウヒュウいていた風が、このときびたりとやみましました。

「あら、そんなこといけませんわ。」

6 【西風に頼む】「頼む」は、委託する。西風に乗せて伝えてきたということ。
7 【まるで】全然。さっぱり。

「もちろんいけないですよ。汽車が来るとき、腕を下げてがんばるなんて、そんなことあなたのために僕のためにもならないから僕はやりはしませんよ。けれどもそんなことでもしようというんです。僕あなたくらい大事なものは世界中ないんです。どうか僕を愛してください。」

シグナレスは、じっと下の方を見て黙って立っていました。本線シグナルつきの背の低い電信柱は、まだてたらの歌をやっています。

「ゴゴンゴーゴー、

山の岩屋で、

熊が火をたき、

あまりけむくて、

ほらを逃げ出す。ゴゴンゴー、

田螺はのろのろ、

うう、田螺はのろのろ。

田螺のしゃっぼは、

羅紗の上等　ゴゴンゴーゴー。」

本線のシグナルはせっかちでしたから、シグナレスの返事のないのに、まるで慌ててしまいました。

「シグナレスさん、あなたはお返事をしてくださらないんですか。ああ僕はもうまるで暗闇だ。目の前がまるで真っ黒な淵のようだ。ああ雷が落ちてきて、いっぺんに僕の体を碎け。足もとから噴火が起こって、僕を空の遠くに放り投げろ。もうなにもかもみんなおしまいだ。雷が落ちてきていっぺんに僕の体を碎け。足もと……。」

「いや若様、雷が参りました節は手前一人に御災いを頂戴いたします。どうかご安心を願います。」

シグナルつきの電信柱が、いつかてたらの歌をやめて頭の上の針金の槍をびんと立てながら目をパチパチさせていました。

「えい。おまえなんか何を言うんだ。」

僕はそれどこじゃないんだ。」

「それはまたどうしたことてござりまする。」

「ちょっとやつがれまでお申し聞けになりとう存じます。」

「いいよ、おまえは黙っておいで。」シグナルは高く叫びました。しかしシグナルも、もう黙ってしまいました。

雲がだんだん薄くなって柔かな日がさしてまいりました。

(三)

五日の月が、西の山脈の上の黒い横雲から、もういっぺん顔を出して山へ沈む前の、ほんのしばらくを鈍い鉛のような光で、そこらをいっばいにしました。冬枯れの木や積み重ねられた黒い枕木はもうろんのこと、電信柱まで、みんな眠ってしまいました。遠くの遠くの風の音か水の音がごとくと鳴るだけです。

「ああ、僕はもう生きてるかいないんだ。汽車が来るたびに腕を下げたり、青い眼鏡をかけたりいったい何のためにこんなことをするんだ。もうなんにもおもしろくない。ああ死のう。けれどもどうして死ぬ。やっぱり雷か噴火だ。」

7 【岩屋】岩の洞窟。ほら穴。
11 【田螺】たにし。水田などにすむ、巻き貝の一種。
13 【しゃっぼ】帽子。もとはフランス語の chapeau から。
14 【羅紗】厚地の毛織物。もとはポルトガル語の lã de raio から。

1 【手前】へりくだった一人称。わたくし。
1 【御災い】貴い人に降りかかる災いなので、「御」をつけている。
8 【やつがれ】へりくだった一人称。
17 【眼鏡】ここでは、信号の明かりのこと。

本線のシグナルは、今夜も眠られませんでした。非常な煩悶^{はんもん}でした。けれどもそれはシグナルばかりではありません。枕木^{まくらぎ}の向こうに青白くしょんぼり立って赤い火を掲^{かか}げている、軽便鉄道^{けいべんてつどう}のシグナル、すなわちシグナレスとても全くそのとおりでした。

「ああ、シグナルさんもあんまりだわ、あたしが言えないでお返事もできないのを、すぐあんなに怒^{おこ}っておしまいになるなんて。あたしもうなにもかもみんなおしまいだわ。おお神様、シグナルさんに雷^{かみなり}を落とすとき、一緒に私^{いっしょ}にもお落としく下さいませ。」

こう言って、しきりに星空に祈^{いの}っているのです。ところがその声が、かすかにシグナルの耳に入りました。シグナルはぎょっとしたように胸を張って、しばらく考えていましたが、やがてガタガタ震^{ふる}えだしました。

震^{ふる}えながら言いました。

「シグナレスさん。あなたは何を祈^{いの}っていられますか。」

「あたし存じませんわ。」シグナレスは声を落として答えました。

「シグナレスさん、それはあんまりひどいお言葉でしょう僕はもう今すぐでもお雷^{らい}さんに潰^{つぶ}されて、または噴火^{ふんか}を足もとから引っぱり出して、または潔^{いさぎよ}く風に倒^{たお}されて、またはノアの洪水^{こうすい}をひっかぶって、死んでしまおうというんですよ。それなのに、あなたはちっとも同情してくださいませんか。」

「あら、その噴火^{ふんか}や洪水^{こうすい}を。あたしのお祈^{いの}りはそれよ。」シグナレスは思いきって言いました。「シグナルはもううれしくてうれしくて、なおさら、ガタガタガタガタ震^{ふる}えました。その赤い眼鏡^{めがね}も揺^ゆれたのです。」

「シグナレスさん。なぜあなたは死ななきゃあならないんですか。ね、僕^{ぼく}へお話しください。ね。」

僕^{ぼく}へお話しください。きっと、僕^{ぼく}はそのいけないやつを追っばらってしまいますからいったいどうしたんですね。」

「だって、あなたがあんなにお怒^{おこ}りなざるんですもの。」

「ふふん。ああ、そのことですか。ふん。いいえ。そのことならばご心配ありません。大丈夫^{だいじょうぶ}です。僕^{ぼく}ちっとも怒^{おこ}ってなんかいはしませんからね、僕^{ぼく}、もうあなたのためなら、眼鏡^{めがね}をみんな取られて、沼^{ぬま}の底へたたき込まれたって、あなたを恨^{うら}みはしませんよ。」

「あら、本当。うれしいわ。」

「だから僕^{ぼく}を愛してください。さあ僕^{ぼく}を愛するって言ってください。」

五日のお月さまは、このとき雲と山の端^はとのちょうどまん中にいました。シグナルはもうまるで顔色を変えて灰色の幽霊^{ゆうれい}みたいになって言いました。

「またあなたは黙^{だま}ってしまいましたね。やっぱり僕^{ぼく}が嫌^{きら}いなんでしょう。もういいや、どうせ僕^{ぼく}なんか噴火^{ふんか}か洪水^{こうすい}か風かにやられるに決まってるんだ。」

「あら、違いますわ。」

「そんならどうですどうです、どうです。」

「あたし、もう大昔からあなたのことばかり考えていましたわ。」

「本当ですか、本当ですか、本当ですか。」

「ええ。」

「そんならいいでしょう。結婚^{けっこん}の約束をしてください。」

「でも。」

「でもなんですか、僕^{ぼく}たちは春になったらつばめに頼^{たの}んで、みんなにも知らせて結婚^{けっこん}の式を挙げ

1 【煩悶^{はんもん}】もだえ苦しむこと。苦惱^{くなん}。

14 【ノアの洪水^{こうすい}】旧約聖書の創世^{そうせい}記^きで語られる、神が起^たこした大洪水^{だいこうすい}のこと。

9 【山の端^は】稜線^{りょうせん}。山が空と接する部分。

ましよう。どうか約束してください。」

「だってあたしはこんなつまらないんですわ。」

(四)

「わかってますよ。僕にはそのつまらないところが尊いんです。」

すると、さあ、シグナレスはあらん限りの勇気を出して言いだしました。

「でもあなたは金でできてるでしょう。新式でしょう。赤青眼鏡も二組まで持っていらっしやるわ、夜も電灯でしょう、あたしは夜だってランプですわ、眼鏡もただ一つきりそれに木ですわ。」

「わかってますよ。だから僕は好きなんです。」

「あら、本当。うれしいわ。あたしお約束するわ。」

「え、ありがとうございます、うれしいなあ僕もお約束しますよ。あなたはきっと、私の未来の妻だ。」

「ええ、そうよ、あたし決して変わらないわ。」

「結婚指環をあげますよ、そらねあすこの四つ並んだ青い星ね。」

「ええ。」

「あのいちばん下の足もとに小さな環が見えるでしょう、環状星雲ですよ。あの光の環ね、あれを受け取ってください、僕の真心です。」

「ええ。ありがとうございます。」

「ワッハッハ。大笑いだ。うまくやってやがるぜ。」

突然向こうの真っ黒な倉庫が空にもはばかるような声で怒鳴りました。二人はまるでしんとなっていました。

ところが倉庫がまた言いました。

「いや心配しなさんな。このことは決して他へは漏らしませんぞ。わしがしっかり飲み込みました。」

そのときです、お月様がカブンと山へお入りになって辺りがポカッと薄暗くなったのは。

今は風があんまり強いので電信柱どもは、本線のほうも、軽便鉄道のほうもまるで気が気でなく、ぐうんぐうんひゅうひゅうと独楽のようにうなっております。それでも空は真っ青に晴れていました。

本線シグナルつきの太っちょの電信柱も、もうでたらめの歌をやるどころの話ではありません、できるだけ体を縮めて目を細くして、ひとなみに、ブウウ、フウウとうなっております。おりました。

シグナレスは、このとき、東のぐらぐらするくらい強い青光の中を足を引きずるようにして走っていく雲を見ておりましたがそれからチラッとシグナルのほうを見ました。

シグナルは、今日は巡査のようにしゃんと、立っていましたが、風が強くて太っちょの電信柱に聞こえないのいいことにして、シグナレスに話しかけました。

(五)

「どうもひどい風ですね。あなた頭がほてって痛みはしませんか。どうも僕は少しくらくらしますね。いろいろお話ししますから、あなたただ頭を振ってうなずいてだけいてください。どうぞお返事をして、僕のところへ届きはしませんから、それから僕の話でおもしろくないことがあったら横の方に頭を振ってください。これは、本当は、ヨーロッパの方のやり方なんですよ。」

6 【金でできてる】 金属製である。

14 【環状星雲】 こと座のベータ星とガンマ星の間にある惑星状星雲。中心星の発する高温の光によってそのまわりのガス体が環状に輝いて見える。

向こうでは、僕たちのように仲のいいものが他の人に知れないようにお話をするときには、みんなこうするんですよ。僕それを向こうの雑誌で見たんです、ね、あの倉庫のやつめ、おかしなやつですね。いきなり僕たちの話してるところへ口を出して、引き受けたのなんのって言うんですもの、あいつはずいぶん太ってますね、今日も目をパチパチやらかしてますよ。

僕のあなたにものを言ってるのはわかかっていても、何を言ってるのか風でいっこう聞こえないんですよ、けれども全体、あなたに聞こえてるんですか、聞こえてるなら頭を振ってください、ええそう、聞こえるでしょうね。僕たち早く結婚したいもんですね。早く春になりゃあいいんですね。

僕のとこのぶっきりに少しも知らせないでおきましょう。そしておいて、いきなり、ウヘン、ああ風で喉がぜいぜいする。ああひどい。ちょっとお話をやめますよ。僕喉が痛くなっただんです。わかりましたか、じゃちょっとさよなら。」

それからシグナルは、ううううと言いなながら目をぱちぱちさせてしばらくの間黙っていました。シグナルスもおとなしくシグナルの喉の治るのを待っていました。電信柱どもは、ブンブンゴンゴンと鳴り、風はひゅうひゅうとやりました。

(六)

シグナルはつばを飲み込んだりえーえーとせきばらいをしたりしていました。やっとな喉の痛いのが治ったらしく、もういっぺんシグナルスに話しかけました。けれどもこのときは、風がまるで熊のようにほえ、まわりの電信柱どもは山いっぱいの蜂の巣をいっぺんに壊してもしたようにぐわんぐわんとうなっていましたので、せっかくのその声も、半分ばかりしかシグナルスに届

きませんでした。

「ね、僕はもうあなたのためなら、次の汽車の来るとき、がんばって腕を下げないことでも、なんでもするんですからね、わかったでしょう。あなたもそのくらいの決心はあるでしょうね、あなたは本当に美しいんです、ね、世界の中にだって僕たちの仲間はいくらもあるでしょう。その半分はまあ女の子でしょうがねえ、その中であなたはいちばん美しいんです。もっとも他の女の子僕よく知らないんですけれどね、きっとそうだと思うんですよ、どうです聞きますか。僕たちのまわりにいるやつはみんなばかです。僕とこのぶっきりが僕が何をあなたに言ってるのかと思って、そらごらんさない、一生懸命、目をパチパチやっていますよ、こいつときたら全くチョークよりも形が悪いんですからね、そら、今度はあんなに口を曲げていますよ、あきれたばかりです。僕の話聞きますか、僕の……。」

「若様、さっきから何をべちゃべちゃ言っているんです。しかもシグナルス風情と、いったい何をにやけていらっしやるんです。」

いきなり本線シグナルつきの電信柱が、むしゃくしゃまぎれにごうごうの音の中を途方もない声で怒鳴ったもんですから、シグナルはもちろんシグナルスも真っ青になってびたっとこっちへ曲げていた体をまっすぐに直しました。

「若様、さあおっしゃい。役目として承らなければなりません。」

(七)

シグナルは、やっとな元気を取り直しました。そしてどうせ風のために何を言っても同じことなのをいいことにして、

9 【ぶっきりに】丸太をぶつた切ったもの、ぶっきらぼうなやつ、など、さまざまな解釈がある。

7 【僕とこの】僕のところの。

「ばか、僕はシグナレスさんと結婚して幸福になって、それからおまえにチョコレートのお嫁さんを入れてやるよ。」

とこう真面目な顔で言ったのでした。その声は風下のシグナレスにはすぐ聞こえましたので、シグナレスは怖いながら思わず笑ってしまいました。さあそれを見た本線シグナルつきの電信柱の怒りようといったらありません。さっそくブルブルッと震えあがり、青白くのぼせてしまい唇をきつとかみながらすぐひどく手をまわしてすなわちいっぺん東京まで手をまわして風下にいる軽便鉄道の電信柱に、シグナルとシグナレスの対話が、いったい何だったか今シグナレスが笑ったことは、どんなことだったか尋ねてやりました。

ああ、シグナルは一生の失策をしたのでした。シグナレスよりも少し風下に、すてきに耳のいい長い長い電信柱がいて知らん顔をしてすまして空の方を見ながら、さっきからの話をみんな聞いていたのです。そこで、さっそく、それを東京を経て本線シグナルつきの電信柱に返事をしてやりました。

本線シグナルつきの電信柱は、キリキリ歯がみをしながら聞いていましたが、すっかり聞いてしまうと、さあまるでもうばかのようにになって怒鳴りました。

「くそッ、えいっ。いまましい。あんまりだ、あんまりだ。ええ、若様私だって男ですぜ、こんなにひどくばかにされて黙っているとお考えですか。結婚だなんてやれるならやっごらんなさい。電信柱の仲間は今みんな反対です。シグナル柱の人だちだって鉄道長の命令に背けるもんですか。そして鉄道長は私の叔父ですぜ。結婚なり何なりやっごらんなさい。」

本線シグナルつきの電信柱は、すぐ四方に電報をかけました。それからしばらく顔色を変えてみんなの返事を聞いていました。確かにみんなから反対の約束をもらったらしいのでした。それ

からきつと叔父のその鉄道長とかにもうまく頼んだにちがいありません。シグナルもシグナレスも余りのことに今さらポカンとして呆れていました。本線シグナルつきの電信柱はすっかり反対の準備ができると今度は急に泣き声で言いました。

(八)

「ああ、八年の間、夜昼寝ないで面倒を見てやってそのお礼がこれか。ああ情けない、もう世の中は乱れてしまった。ああもうおしまいだ。情けない。メリケン国のエジソン様もこのあさましい世界をお見捨てなされたか。オンオンオンオン、ゴゴンゴゴゴゴンゴ。」

風はますます吹きつものり、西の空が変に白くぼんやりなってどうも怪しいと思っっているうちにチラチラチラチラとうとう雪がやってまいりました。

シグナルは力を落として青白く立ち、そっと横目で優しいシグナレスの方を見ました。シグナレスはしくしく泣きながら、ちょうどやってくる二時の汽車を迎えるためにしょんぼりと腕を下げて、そのいじらしいなで肩はかすかにかすかに震えておりました。空では風がフィウ、涙を知らない電信柱どもはゴゴンゴゴゴンゴゴゴ。

さあ今度は夜ですよ。シグナルはしょんぼり立っておりました。

月の光が青白く雪を照らしています。雪はこうこうと光ります。そこには透きとおって小さな紅火や青の火を浮かべました。しいんとしています。山脈は若い白熊の貴族の死体のように静かに白く横たわり、遠くの遠くを、昼間の風の名残がヒュウと鳴って通りました、それでも実に静かです。黒い枕木は皆眠り赤の三角や黄色の点々さまさまの夢を見ているとき、若い哀れなシグナルはほっと小さなため息をつきました。そこで半分凍えてじっと立っていた優しいシグナレ

9 【失策】へま。しくじり。
19 【電報】電信を利用して行う通信。

スも、ほっと小さなため息をしました。

「シグナレスさん。本当に僕たちはつらいねえ。」

「たまらずシグナルがそっとシグナレスに話しかけました。」

「ええみんなあたしがいけなかったのですわ。」シグナレスが青白くうなだれて言いました。

(九)

諸君、シグナルの胸は燃えるばかり、

「ああ、シグナレスさん、僕たちたった二人だけ、遠くの遠くのみんなのいないところに行ってしまうたいね。」

「ええ、あたし行けさえるならどこへでも行きますわ。」

「ねえ、ずうっとずうっと天上にあの僕たちの約婚指環^{エンゲージリング}よりも、もっと天上に青い小さな小さな火が見えるでしょう。そら、ね、あすこは遠いですねえ。」

「ええ。」

シグナレスは小さな唇^{くちびる}で今にもその火にキッスしたそうに空を見上げていました。

「あすこには青い霧の火が燃えているんでしょね。その青い霧の火の中へ僕たち一緒に座^{いっしょ}りたいですねえ。」

「ええ。」

「けれどあすこには汽車はないんですね、そんなら僕畑^{ぼく}をつくらうか。何か働かないといけな
いんだから。」

「ええ。」

「ああ、お星様、遠くの青いお星様。どうか私どもをとってください。ああ情け深いサンタマリヤ、また恵み深いジョウジスチブソン様、どうか私どもの悲しい祈^{いの}りを聞いてください。」

「ええ。」

「さあ一緒に祈^{いの}りましょう。」

「ええ。」

「哀^{あわ}れみ深いサンタマリヤ、透^すきとおる夜の底、冷たい雪の地面の上に悲しく祈^{いの}る私どもを見そなわせ、恵み深いジョウジスチブソン様、あなたのしもべのまたしもべ、悲しいこの魂^{たましい}のまことの祈^{いの}りを見そなわせ、ああ、サンタマリヤ。」

「ああ。」

(十)

星は静かに巡^{めぐ}っていききました。そこであの赤目^{あかめ}のさそりが、せわしく瞬^{またた}いて東から出てき、そしてサンタマリヤのお月様が慈愛^{じあい}に満ちた尊い黄金^{きん}のまなざしに、じっと二人を見ながら、西の真^まつ黒の山にお入りになったとき、シグナルシグナレスの二人は、祈^{いの}りに疲^{つか}れてもう眠^{ねむ}っていました。

今度は昼間です。なぜなら夜昼はどうしてもかわるがわるですから。

「きらきらのお日様が東の山を昇^{のぼ}りました。シグナルシグナレスはぼつと桃色^{ももいろ}に映^はえました。いきなり大きな幅^{はば}広い声^{こゑ}がそこら中にはびこりました。」

「おい。本線シグナルつきの電信柱、おまえの叔父^{おじ}の鉄道長に早くそう言って、あの二人は一緒^{いっしょ}にしてやったほうがよからうぜ。」

1 【サンタマリヤ】聖母マリ

ア。

2 【ジョウジスチブソン】
ジョージ・ステイブソン。
鉄道の父と称された
技術者。

6 【見そなわす】ご覧にな
る。

見るとそれは先頃の晩の倉庫の屋根でした。

倉庫の屋根は、赤い上薬をかけた瓦を、まるで鎧のようにキラキラ着こんで、じろっと辺りを見回しているのです。

本線シグナルつきの電信柱は、がたがたと震えてそれからじっと固くなって答えました。

「ふん、なんだとおまえはなんの縁故でこんなことに口を出すんだ。」

「おいおい、あんまり大きな面をするなよ。ええおい。俺は縁故といえは大縁故さ、縁故でないといえ、いっこう縁故でもなんでもないぜ、がしかしさ。こんなことにはてめいのような変ちきりんはあんまりいろいろ手を出さないほうが結局てめいのためだろうぜ。」

「なんだと。俺はシグナルの後見人だぞ。鉄道長の甥だぞ。」

「そうか。おい立派なもんだなあ。シグナル様の後見人で鉄道長の甥かい。けれどもそんなら俺なんてどうだい、俺様はな、ええ風引きの脈の甥だぞ。どうだ、どっちが偉い。」

「何をっ。コリッ、コリコリッ、カリッ。」

「まあまあそう怒るなよ。これは冗談さ。悪く思わんでくれ。な、あの二人さ、かあいそうだよ。いいかげんにまとめてやれよ。大人らしくもないじゃないか。あんまり胸の狭いことは言わんでさ。あんな立派な後見人をもって、シグナルも本当に幸せだと言われるぜ。な、まとめてやれ、まとめてやれ。」

本線シグナルつきの電信柱は、ものを言おうとしたのでしたがもうあんまり気が立ってしまってパチパチパチパチ鳴るだけでした。

倉庫の屋根もあんまりのその怒りように、まさかこんなはずではなかったというように少しあきれて黙ってその顔を見ていました。お日様はずうっと高くなり、シグナルとシグナレスとは

ほっとまたため息を一つお互いに顔を見合わせました。シグナレスは瞳を少し落としシグナルの白い胸に青々と落ちた眼鏡の影をチラッと見てそれからわかにはまた考えがあらからそんな足もとを見つめ考えこんでしまいました。

今夜は暖かです。

霧が深く深くこめました。

その霧を通して、月の明かりが水色に静かに降り、電信柱も枕木も、みんな寝静まりました。シグナルが待っていたようにほっと息をしました。シグナレスも胸いっぱい思いをこめて小さくほっと吐息しました。

そのときシグナルとシグナレスとは、霧の中から倉庫の屋根の落ち着いた親切らしい声の響いてくるのを聞きました。

「おまえたちは、全く気の毒だね。私は今朝うまくやってやろうと思ったんだが、かえっていけなくしてしまった。本当に気の毒なことになったよ。しかし私にはまた考えがあるからそんな心配しないでもいいよ。おまえたちは霧でお互いに顔も見えず寂しいだろう。」

「ええ。」

「ええ。」

「そうか。では俺が見えるようにしてやろう。いいか、俺の後について二人一緒にまねをするんだぜ。」

(十一)

「ええ。」

2 【上薬】 釉薬。陶器や磁器を焼くとき、最後に塗って表面に艶を出す薬品。

5 【縁故】 血縁や知人といった特別な関わり。

7 【てめい】 おまえ。

10 【後見人】 人の後ろ盾となって世話をする人。

14 【まとめる】 「縁談をまとめる」で、両家の間をとりもち、結婚を成立させるという意味の表現。

14 【胸の狭い】 心が狭い。

「そうか。ではアルファア。」
「アルファア。」

「ビーター。」「ビーター。」

「ガムマア。」「ガムマアア。」

「デルタア。」「デルターターアアア。」

実に不思議です。いつかシグナルとシグナレスとの二人は真っ黒な夜の中に肩を並べて立っていました。

「おや、どうしたんだろう。辺り一面真っ黒びろうどの夜だ。」

「まあ、不思議ですわね、まっくらだわ。」

「いいや、頭の上が星でいっぱいです。おや、なんと巨大な強い星なんだろう、それに見たこともない空の模様ではありませんか、いったいあの十三連なる青い星は前どこにあったのでしょうか、こんな星は見たことも聞いたこともありませんね。僕たちぜんたいどこに来たんでしょうね。」

「あら、空があんまり速く巡りますわ。」

「ええ、あああ大きな星は地平線から今昇ります。おや、地平線じゃない。水平線かしら。そうです。ここは夜の海の渚ですよ。」

「まあきれいだわね、あの波の青光。」

「ええ、あれは磯波の波がしらすです、立派ですわね、行ってみましょう。」

「まあ、本当にお月様の明かりのような水よ。」

「ね、水の底に赤いひとでがいますよ。銀色のなまこがいますよ。ゆっくりゆっくり、はってま

8 【びろうど】ピロッド。艶があって滑らかな布。
11 【十三連なる青い星】おうし座の一部、プレアデス星団の星のことか。
18 【波がしらす】波の盛り上がった、高い部分。

すねえ。それからあのユラユラ青光のとげを動かしているのは、雲丹ですわね。波が寄せてきます。少し遠のきましよう。」

「ええ。」

「もう、何べん空が巡ったでしょう。大変寒くなりました。海がなんだか凍ったようですね。波はもう打たなくなりました。」

「波がやんだせいでしょうかしら。なにか音がしていますわ。」

「どんな音。」

「そら、夢の水車のきしりのような音。」

「ああそうだ。あの音だ。ピタゴラス派の天球運動の諧音です。」

「あら、なんだか周りがぼんやり青白くなってきましたわ。」

「夜が明けるのでしょうか。いやはてな。おお立派だ。あなたの顔がはっきり見える。」

「あなたもよ。」

「ええ、とうとう、僕たち二人きりですね。」

「まあ、青白い火が燃えていますわ。まあ地面も海も。けど熱くないわ。」

「ここは空ですよ。これは星の中の霧の火ですよ。僕たちの願いが叶ったんです。ああ、さんたまりや。」

「ああ。」

「地球は遠いですね。」

「ええ。」

「地球はどっちの方でしょう。辺り一面の星どこがどこかもわからない。あの僕のブッキリコ

8 【水車】水車のこと。

8 【きしり】物がこすれ合っ

て音をたてること。

9 【諧音】音の調和。

はどうしたろう。あいつは本当はかあいそうですね。」

「ええ、まあ火が少し白くなったわ、せわしく燃えますわ。」

「きっと今秋ですね。そしてあの倉庫の屋根も親切でしたね。」

「それは親切とも。」いきなり太い声がありました。気がついて見るとああ二人とも一緒に夢を見ていたのでした。

いつか霧が暗れて空一面の星が、青や橙だいだいやせわしくせわしく瞬またたき、向こうには真っ黒な倉庫の屋根が笑いながら立っておりまして。

二人はまたほっと小さな息をしました。

〈出典 「宮沢賢治コレクション2 注文の多い料理店」(筑摩書房、二〇一七年)〉

【著者】宮沢賢治(みやざわけんじ)

一八九六(明治二九)年—一九三三(昭和八)年

農学者、詩人、童話作家。岩手県の生まれ。

【著書】『春と修羅』、『注文の多い料理店』など